

咸興からの母子脱出「内地はまだ？…」

山門郡三橋町 木下 かほる

主人は警察官、子供5人と私、家族揃って平和な生活をしていたのです。戦争の前までは。でもとうとう戦争となってしまう、日本人同士でも色々と問題が起こったり、主人の仕事柄誘惑も多く、適当にうまく対応すれば得をした事も、潔癖が故に断じて受け入れなかったのをよく覚えています。5人の空腹の子供を抱えて、内心私は不服でもありました。

突然家へソ連兵が押し入って来て、子供達と共に逃げ回ったりしたことも度々ありました。ある時は子供達を隠して私ひとりソ連兵の前へ出て行き抗議したこともありました。私はその時妊娠してお腹が大きかったのですが。

終戦を迎え、主人はシベリヤへ抑留されました。お別れに母子で逢いに行った時のこと、その時の主人の苦しそうな顔、あまり訳の分からない子供達の顔など生涯忘れることはできません。もうこれが最後の別れと思いましたので。

そして、昭和21年5月1日から6月12日までの、咸鏡南道咸興府より38度線京城まで、43日間の母子脱出行が始まったのです。私34才、長女12才、長男9才、次男6才、次女3才、三女5ヶ月でした。最初からの野宿は覚悟でした。リュックをそれぞれ背に、非常食のいり豆、いり米、水枕、氷のう等を持って。水枕、氷のうは万一途中で汽車に乗れた場合、ぎっしりで子供達がトイレに行けない時の用心のために。鍋ひとつ持っていたので途中川原で炊いたり、色々と知恵を絞りながらの脱出。そして鉄道沿線は韓国保安隊の監視が厳しいので、田舎道を夜歩きました。毎日毎日ただ歩くのみでした。

咸興出発当時は大勢の脱出でしたが、我が家は母子のため他人と一緒にいって行けず、足の弱い人達同志の一団に入っていました。しかし途中で騙されて道を教えられたり、38度線到着の頃はごく少数になってしまっていました。途中で栄養失調や病気などで我が子を亡くした人は松の根元に埋めたり、船の中では海中へ水葬にしなくてはならず、その時の母親達の狂ったような泣き声は今もこの耳に残って消えません。「内地はまだ？。内地はまだ？」と繰り返す子供達の声も。

京畿道仁川より、興安丸で博多上陸…。私達の悪夢の脱出行でした。まさに小説「人間の条件」と同様でした。その後は主人の実家にお世話になり、なつかしい日本での生活が始まりましたが、皆さん同様戦後の厳しい毎日でした。

ある日、主人がシベリヤで亡くなったと生還者より聞かされました。私は今まで張りつめていた力が全て抜け、初めて大声を出して泣き崩れました。子供達は「お母さんがあんなに泣いたのは初めてだった」と、今語ってくれますが。

しかしそれは誤報だったのです。昭和25年2月、主人はナホトカより舞鶴に上陸し無事帰って来てくれました。主人の抑留生活も言葉には表わせないくらいの苦労の連続でしたが、主

